

# ともに生きる

誰もが住みやすいまちに



はまってけらいん かだってけらいん

AIDS文化フォーラム in 陸前高田 

2016 報告書



### 事前設営

11月19日(土)15時~21時 20日(日)10時~



### 高校生ボランティア

2名の高校生ボランティアがフォーラムを支えてくれました。



### 前夜はまかだ

京都、岡山、横浜からも参加者が多様性を実感できたはまかだ



## 目次

1. 事前設営・高校生ボランティア・前夜はまかだ	…P 2
2. 目次・AIDS文化フォーラムとは・「文化」の2文字・広がるAIDS文化フォーラム・ はまってけらいん かだってけらいん運動・ノーマライゼーションという言葉のいらないまちづくり	…P 3
3. オープニング・ノーマライゼーション大使委嘱式・熊谷晋一郎先生の履歴・アクシデント	…P 4
4. はまかだトーク:ともに走ろう、ゴールは一緒	…P 4
自立は、依存先を増やすこと 希望は、絶望を分かち合うこと 熊谷晋一郎さん	…P 6
5. いま、若い世代に伝えたいサバイバルガイド	…P 8
6. ノーマ・はまかだスポット・展示コーナー	…P 9
7. 陸前高田応援マラソン:ともに走ろう、ゴールは一緒	…P 12
8. はまかだライブ:ともに歌おう「ありがとう」	…P14
9. 打ち上げはまかだ	…P15
10. 新聞記事	…P15



### AIDS文化フォーラムとは？

1994年、横浜で開催された国際エイズ会議をきっかけに、市民の手による、市民のために始まったフォーラムです。HIV/AIDSに関する様々な活動を行うNGO、NPO、学生、PWA/H、行政、個人はもちろんのこと、様々な分野で活動している人たちが集まり、発表・展示・交流を行っています。横浜では2016年に23回目を迎えました。2005年に陸前高田市で始まったHIV/AIDSのイベントが2013年にAIDS文化フォーラム in 陸前高田として復活。

### 「文化」の2文字

なぜAIDS「文化」フォーラムなのか？それはフォーラムがHIV/AIDSを医療だけの問題としてとらえるのではなく、広く文化の問題としてとらえることに重きを置いているからです。セクシャリティ、ジェンダー、セックス、若者、ドラッグ、学校、教育…私たちの生活＝「文化」とHIV/AIDSは深く関わっているのです。

### 広がるAIDS文化フォーラム

横浜で始まったAIDS文化フォーラムは京都、陸前高田へと広がり、2014年度には佐賀に広がりました。これは単にHIV/AIDSの問題に向き合うだけでなく、HIV/AIDSを通して生きること、偏見や差別に関することなどを、様々な角度から考える場になっているからだと考えています。

### はまってけらいん かだってけらいん運動

陸前高田市保健医療福祉未来図会議では、市民一人ひとりが様々なストレスと上手に付き合うために、日常生活(買い物、農作業、病院など)のあらゆる場面、様々なイベント(地域の行事や祭など)などの機会に**はまって**(集まって)**かだる**(語る)ことで、お互いの経験や情報を共有し、少しずつ余裕を身につけて行くことを目指した運動を展開しています。

### ノーマライゼーションという言葉のいらないまちづくり

陸前高田市では、一人ひとりが、自分自身の、そして相手の、障がい、年齢、セクシュアリティ、病気、国籍といった個性を意識することのない、誰もが暮らしやすい、住みやすいまちづくりを進めています。

### いろいろメモ

会場:陸前高田市コミュニティホール  
来場者数:300名  
スタッフ:50名  
天候:晴れ



秘忍者ジミー・ハットリくんと、陸前高田市ゆめ大使たかたのゆめちゃん



## オープニング 挨拶

陸前高田市市長 戸羽 太

震災で一時的に中断されましたが、フォーラムは10回目を迎えました。切り口はエイズですが「ノーマライゼーションという言葉のいないまちづくり」について考える機会にしたいと思います。

岩手県大船渡保健所長 久保 慶祐

ハンセン病、結核、エイズではスティグマ(差別、偏見の意)を乗り越えるには本日のような「はまってけらいん かだってけらいん運動」が重要になることを分かち合いたいと思います。



## 陸前高田市ノーマライゼーション大使委嘱式

ヘルスプロモーション推進センター(オフィスいわむろ)代表 岩室 紳也



これまでの陸前高田市ノーマライゼーション大使(敬称略)

元SPEED 参議院議員	今井絵理子
日本障害フォーラム幹事会議長	藤井 克徳
画家	田崎 飛鳥
車いすフェンシングアスリート	加納慎太郎

これまでの大使は皆当事者だったのに対して、当事者ではない私が今回陸前高田市ノーマライゼーション大使を仰せつかったことに意味と重みを感じています。震災後から陸前高田市で市民の一人ひとりが元気になるまちづくりを、市民、関係機関、行政の皆様と共に取り組んできましたが、これからも、しっかりと「ノーマライゼーションという言葉のいないまちづくり」の視点を皆様と共有しつつ、誰もが暮らしやすい陸前高田づくりを進めることを求められていることを重く受け止めたいと思っています。

平成28年11月に市役所職員を対象とした「ノーマライゼーションという言葉のいないまちづくり推進マスター研修」で「ノーマライゼーションという言葉のいないまち」と「ノーマライゼーションという言葉が必要なまち」を比べると、後者が不健康な人を増やすまちであり、健康なまちづくりの実現が「ノーマライゼーションという言葉のいないまちづくり」が目指していることだと、あらためて確認させていただきました。

AIDS文化フォーラムも当初から偏見や差別の払拭に取り組んできましたが、これまでの経験を踏まえ、また、多くの人と協働する中で、市民の一人ひとりが元気になる陸前高田市づくりを推進できるよう、これからもできることを重ね続けたいと思います。(文責：岩室紳也)

「ノーマライゼーションという言葉のいないまち」とは

一人ひとりが、  
自分自身の、  
そして相手の、

障がい、年齢、セクシュアリティ、病気、国籍といった個性を  
意識することのない、

誰もが暮らしやすい、住みやすいまち

「ノーマライゼーションという言葉が必要なまち」とは

一人ひとりが、  
自分自身の、  
そして相手の、

障がい、年齢、セクシュアリティ、病気、国籍といった個性を  
意識しむから、意識させられむから

暮らしざるを得ない、ストレスの多いまち

## 熊谷晋一郎先生の履歴

1977年、山口県生まれ。小児科医。新生児仮死の後遺症で脳性麻痺に、以降車いす生活となる。小中高と普通学校で統合教育を経験。大学在学中は全国障害学生支援センターのスタッフとして、他の障害者とともに高等教育支援活動をおこなう。東京大学医学部卒業後、病院勤務等を経て、現在は東京大学先端研究センター特任准教授。(TOKYO人権より抜粋一部改編)

## アクシデント

陸前高田入りをご本人も楽しみにされていた熊谷晋一郎先生でしたが、尿路結石のため陸前高田入りを断念せざるを得ませんでした。尿路結石は日本人の20人に1人が経験しますが、寝たきりの方など体が不自由な方、飲水を控える方などは尿中の成分が結晶化しやすく、また、排石が遅れると尿の停滞に伴い尿路感染症を引き起こすリスクが高くなります。熊谷先生はその後無事排石されたとのこと何よりでした。

## はまかだトーク：ともに走ろう、ゴールは一緒

脳性まひの障がいがある熊谷晋一郎先生と

「自立は、依存先を増やすこと」、「希望は、絶望を分かち合うこと」  
について考えます

シンポジスト (熊谷 晋一郎 東京大学先端科学技術研究センター准教授)

戸羽 太 陸前高田市長

長谷川 順一 一般社団法人陸前高田青年会議所理事長

コーディネーター 岩室 紳也 陸前高田市地域包括ケアアドバイザー

/ヘルスプロモーション推進センター(オフィスいわむろ)

### 進行

熊谷晋一郎先生のインタビュー記事(次頁)をシンポジスト、会場の皆様と読みながら、ノーマライゼーションという言葉の知らないまちづくりについて考えました。

### 岩室 紳也

相模原市にある津久井やまゆり園の事件についての熊谷晋一郎先生の言葉に学びたい。「私たちは加害者なのだ。何故なら今回の事件を引き起こした真犯人はこの少数派を排除してきたコミュニティであり、そしてコミュニティを支えている私たちなのだと考えるからです。」個人の問題ではなく、地域、社会の問題ととらえる視点が重要。



### 戸羽 太

「壁」は自分が作っている。マジックジョンソンのHIV感染が分かった時にショックだったが、自分が応援していた人なので自分で調べた。当事者と関われば「壁」、「勘違い」が取り払われる。

一人暮らしをサポートすることと「自立しなさい」は別。健常者と同じようになることを求めてはいけませんが、チャレンジができる環境づくりが大事。

「文化」というと重くなるが、単発ではなく、継続することで地域に根差した「文化」となっていくことが大事。明るく語るには、パラリンピックのように「表に出て笑顔になる」ことが大事。

障がい者は同じことを指摘する。周りの環境はすべて多数者、健常者に合わせてあり、健常者が発想を変えることが求められている。

「依存」は「頼る」ことではなく、「不得意なことを他人にしてもらうこと」。やりたいこと、やらなければならないことは多いが、市長一人ではできないから他の人に頼むためにもその人と友達になろうと思ったら楽になった。「ノーマライゼーションという言葉の知らないまちづくり」を実現したいからこそいろんな人たちに「ノーマライゼーション大使」を任命させていただいている。

制度が整備されても、一番大事なものは当事者の声を聞くこと。相手の立場に立てるか、あなたがその立場だったらどうかを考えて行動できるかが問われている。

震災直後は「絶望 = 明日のことが考えられない」ことを味わい、いろんな人に応援してもらった。だからこそ、半歩ずつでも前に進んでいる。しかし、障がいや困難を抱えている人はどうか。絶望を分かち合った陸前高田市民だからこそ「ノーマライゼーションという言葉の知らないまちづくり」ができると考えている。



### 長谷川 順一

初めてHIVに感染している人(北山翔子さん)に会って、自分自身に「壁」があることに気が付いた。

チャレンジは周りの環境に影響されることが少なくない。挑戦する機運が「文化」として根付くといいが、一方でチャレンジすることを押し付けるのでは問題。

自立は依存先を増やすこと = 選択肢が多いこと。世の中の多くの人は、震災を含めて想定から少しでもずれると対応できない。自立は隣の人の存在を認めること。青年会議所、陸前高田市に依存している自分がいる。

物を作るにあたって、ハードも大事だが、やはりソフト面が大事。ものに頼るとずっとものに頼り続けてしまう。ハードを作るに当たっても、ソフト面への配慮ができるか否かが問われている。

希望は絶望を分かち合うこと。青年会議所のメンバーで震災後集まって、いろんな話をしながら、一つずつできることをやり続けた。同じ状況で、同じ経験をしたことで、行政との垣根がなくなり、いい雰囲気陸前高田市が包まれた。





## 自立は、依存先を増やすこと 希望は、絶望を分かち合うこと 熊谷晋一郎さん



公益財団法人東京都人権啓発センター

<http://www.tokyo-jinken.or.jp/>

TOKYO人権 第56号 (平成24年11月27日発行)

より許諾を得て転載

新生児仮死の後遺症により脳性まひの障害を持つ熊谷晋一郎さん。“健全な動き”を身につけるため、物心つく前から厳しいリハビリを受けました。しかしそれは、彼にとって「身体に合わない規範を押し付けられる」という体験でした。成長とともにリハビリをやめ、自分らしいあり方を模索。大学進学をきっかけに親元を離れて一人暮らしを始め、試行錯誤しながら自立生活を確立していきました。医学部を卒業後、小児科医となった熊谷さんに、障害を持って生きていくことについてお聞きしました。

脳性まひとはどういう障害ですか？

出生時に呼吸が止まるなどのアクシデントが起きて、その後遺症で運動機能や姿勢を維持する脳機能に障害が生じた状態のことです。基本的に、症状がそれ以上進行することはありません。アクシデントにはさまざまな原因があり、脳のどの場所が傷んだか、障害の表れ方も人それぞれなのですが、十把一絡げに「脳性まひ」と診断されます。私の場合は、「痙直型(けいちょくがた)」といい、言語障害はそれほど重くはないですが、常に身体が緊張していて、うまく体が操れないというタイプです。

子どもの頃のリハビリは壮絶だったそうですね。

物心つく前から厳しいリハビリを受けていました。私が幼かった頃は“心に介入するリハビリ”の全盛期。脳性まひは身体そのものではなく「脳」の問題であるということが、「心や人格」の問題に拡大解釈されていました。それで、リハビリがうまくいかないのは私自身の努力が足りないからだ。意志の問題だから天井なしに目標を設定され、延々と続く“がんばり地獄”の状態。親やトレーナーに一挙手一投足を監視され、「心」を指導され続けました。家ではもちろん、定期的に泊りがけのリハビリキャンプに参加するなど、“健全な動き”ができるようにと、自分の身体には合わない動きを強いられるリハビリ中心の生活でした。

けれども、小学生まではリハビリに一日何時間もかけていたのが、成長とともに徐々に減っていき、高校生の頃には体をほぐす程度のストレッチだけで、リハビリキャンプにも通わなくなりました。当初、母は親心から「息子を苦勞させたくない」「人並みの体にしてあげたい」という思いがとても強かった。でも私が成長するにつれ、「この子は絵を描くのが好きらしい」「勉強している時の方が楽しそう」と、リハビリ以外の私の様子にも目を向けるようになりました。それで「何が何でも健常者のようにしなきゃいけない」という思いは徐々に薄れていったんじゃないかなと思います。

一人暮らしを始めたいきさつは？

小学生の頃、ふと、「親が先に死んでしまったら、自分は生きていられない」と気づきました。当時の私は、生活全般、食事をするのも学校に行くのも、何でも親の介助を受けていましたから。この不安は年齢を重ねるにしたがって大きくなっていきました。親なしで暮らせる“実験”を早めにしておかないとまずいと思っていました。それで、高校を卒業し東京の大学へ進学するのをきっかけに親から離れるというのが、最初で最後のチャンスになるような気がしたんですね。親は当然、猛反対しました。うまくいかなかったら帰ってきなさいとも言っていましたが、自分の中では、ダメだったら実家に帰るという選択肢は無かったですね。

地域で一人暮らしをしている先輩障害者の姿を、子どもの頃になんとなく見ていたこともあって、「自分にもできるはずだ」という確信があったのも大きかったと思います。具体的にどうやっているのかは分からないけど、明らかに自分より障害の重い人が一人暮らしできている。その事実が背中を押してくれました。

一人暮らしを始めて、まず困ったのはトイレでした。最初はなにも手を加えていないトイレで、介助してくれる人もいなくて、失禁してしまいました。でも、こう体を動かしたらうまくいくんじゃないかと、ここに手すりを付けたら使えるんじゃないかと、試行錯誤していくのは楽しい実験でした。私も物に合わせて動きを変えるし、物も私に合わせて形を変える。どちらかが一方的に譲歩するんじゃなくて、物と私が「互いに歩み寄る」。一人暮らしの体験は、生まれて初めて世界と直接交渉することができた、そんなわくわくする感じがしました。それまでは世界と私の間には、いつも親が挟まっていて、「向こう側がよく見えない、じれったい！」みたいな感じでしたからね。

“自立”とはどういうことでしょうか？

一般的に「自立」の反対語は「依存」だと勘違いされていますが、人間は物であったり人であったり、さまざまなものに依存しないと生きていけないんですよ。

東日本大震災のとき、私は職場である5階の研究室から逃げ遅れてしまいました。なぜかという単純で、エレベーターが止まってしまったからです。そのとき、逃げるということを可能にする“依存先”が、自分には少なかったことを知りました。エレベーターが止まっても、他の人は階段やはしごで逃げられます。5階から逃げるという行為に対して三つも依存先があります。ところが私にはエレベーターしかなかった。

ともに生きる ~誰もが住みやすいまちに~

これが障害の本質だと思うんです。つまり、「障害者」というのは、「依存先が限られてしまっている人たち」のこと。健常者は何にも頼らずに自立していて、障害者はいろいろなものに頼らないと生きていけない人だと勘違いされている。けれども真実は逆で、健常者はさまざまなものに依存できていて、障害者は限られたものしか依存できていない。依存先を増やして、一つひとつへの依存度を浅くすると、何にも依存してないかのように錯覚できます。「健常者である」というのはまさにそういうことなのです。世の中のほとんどのものが健常者向けにデザインされていて、その便利さに依存していることを忘れていたのです。

実は膨大なものに依存しているのに、「私は何にも依存していない」と感じられる状態こそが、「自立」といわれる状態なのだろうと思います。だから、自立を目指すなら、むしろ依存先を増やさないといけない。障害者の多くは親が施設しか頼るものがなく、依存先が集中している状態です。だから、障害者の自立生活運動は「依存先を親や施設以外に広げる運動」だと言い換えることができると思います。今にして思えば、私の一人暮らし体験は、親からの自立ではなくて、親以外に依存先を開拓するためでした。

最近の障害者介助について、どう感じていますか？

昔に比べて障害者の介助の現場は「メニューが増えた」と思います。以前は制度自体がなく、生活を組み立てるときには限られた人・ものを活用しながら、なんとか手作業で作り上げていく感じでした。それに比べると、自立支援法成立以後はそういったことが自動化して、制度に乗ってさえしまえば介助者を見つけるのには苦労しなくなりました。

ところが、震災が起きたときに誰も様子を見に来てくれないとか、あるいはそこまで大きいことでなくても、失禁したときに介助を頼もうにも誰にも電話が通じないということがこれまで何度もありました。失禁は不測の事態の顕著な例で、なるべく早くなんとかしたいわけです。それなのに、そういう時にかぎってシステムが全然機能しない。以前に比べて、不測の事態に融通が利かなく、使い勝手が悪くなったと思います。

システムに乗らないものを許さない風潮というか、制度どおりにおこなわれているかどうかを監視するのに、現場が忙殺されているような状態です。それに、あらかじめ決められていること以外は許されないの、介助者との人間関係が深まらなくなった感じがします。心の通じない相手がしてくれる介助は痛いから、怖いんですね。

何でもカテゴリー化して制度を作っていくだけでは、制度に乗りきらない人たちが永遠に生み出され続けていくことになり。首尾よく乗れた人も窮屈を感じるんじゃないでしょうか。メニューがそろって自己選択できるのだけど、いったん選択するとそれに従わざるを得なくなるような圧迫感があります。障害者の自立生活運動では「施設から地域へ」がスローガンだったのに、窮屈な施設から飛び出した先の地域が「施設化」していた、という感じです。

一言で言うなら「揺らぎが無くなった」「揺らげなくなった」ということでしょうか。そしてそれは、世の中全体に着実に浸透しているような気がします。ガチガチに固定されているシステムは、揺らぐことができる「余白」、その場の状況に応じた選択・決定を可能にする余地や余裕がないために、リスクが高く、効率も悪いものです。「揺らぎ」がなくてはイノベーションも起きません。こういった「揺らぎ」や「遊び」という要素をどう維持していくかというのが、今後世の中のことを考えていく上での重要な課題になっていくだろうと思います。

絶望的な世の中に、どのように希望を見出せばよいのでしょうか？

「自立」と「依存」という言葉の関係によく似ていますが、「希望」の反対語は「絶望」ではないと思います。絶望を分かち合うことができた先に、希望があるんです。

先日、当事者研究の集会に参加したときのことで。精神障害や発達障害を持ち、絶望を一人で抱えてきた大勢の人たちに会いました。そのとき感じた感覚はなんとも言葉にしがたかった。さまざまな絶望体験を互いに話し、共有することで、「もう何があっても大丈夫だ」という、不思議な勇気というか希望のようなものが生まれる。話や思いを共有できたからといって、実際には問題は何も解決していないのだけど、それで得られる心の変化はとても大きいんです。

私は長い間、失禁の問題を誰にも話せず、心の中に抱え込んでいました。けれどある日のこと、外出先で漏らしてしまって、通りすがりの人にきれいに洗ってもらったことがあったんです。私は一人で抱えていた絶望を見ず知らずの他人と分かち合えたと思いました。このとき「世界はアウェー（敵地）じゃなかった！」という絶大な希望を感じたんです。たった一人で抱えてきたことを他人に話し、分かち合うことができるようになって、「もう大丈夫」と思えるようになったことは、私にとってとても大きかったです。絶望が、深ければ深いほど、それを共有できたときに生まれる希望は力強いんですよ。



熊谷晋一郎先生の言葉を、パネリストの後ろに投影、紹介しながらはまかだトークを進めました。



# いま、若い世代に伝えたいサバイバルガイド コミュニケーション・ネット・デートDV・HIV/AIDS・失恋

出演者 上村 茂仁 ウィメンズクリニック・かみむら院長 産婦人科医  
佐々木 亮平 陸前高田市地域包括ケアアドバイザー 保健師  
岩室 紳也 陸前高田市地域包括ケアアドバイザー 泌尿器科医



大学生と一緒にメール相談に対応している上村先生の相談サイトから見てくる若者の現状と対策を考えました。

## 若者にこんな傾向が

- ・怒られたことがない
- ・傷つくのが怖い
- ・自分が否定される(フラれる)ことが耐えられない
- ・はじかれるのが怖い
- ・恋人ができて友達に話さない人がデートDVになる傾向がある
- ・みんなと仲良くしたい
- ・表面的な友だちが多い
- ・けんかをする勇気がない
- ・中学2年生で「死にたい」という子が多い
- ・望まない妊娠になってから相談に来る
- ・一見まじめないい子が相談できず、妊娠22週と中絶ができない状況になってから大人が知る



## なぜデートDVになる？

- ・DVになる子どもは「否定」に弱い
- ・「嫌われたくない」という思いがDVにつながる
- ・この人を助けられるのはわたし「しか」いないと思い込む
- ・友達にアドバイスをされても聞き入れられない
- ・恋愛相手は友達より優先順位が高い
- ・恋愛対象は完璧とってしまう
- ・「全」か「無」かの発想になっている

## 普段から気を付けたいこと

- ・考え過ぎない
- ・好きな人に思いを伝えた結果、フラれる経験が大事
- ・一緒に行動する仲間がいる  
告白して、結果的にフラれても乗り越えられる  
喧嘩してもすぐ仲直りができる
- ・辛抱が大事



## 根っこにある問題は？

- ・そもそも「友だち」は何でも話せる人ではなく、いろんな「友だち」がいていい
- ・いろんな場所に自分の思いを分散させていない
- ・自立は依存先を増やすこと
- ・小学生の段階からしゃべれる環境をつくらせていない

## 大事なことは

はまってけらいん かだってけらいんをし続けていれば、仲間ができ、トラブルを乗り越えられる  
「はまかだ」を全国へのメッセージに



出演者3名は若者たちの現状に警鐘を鳴らす「サバイバルガイド」(日本評論社)の共著者





# ノーマ・はまかだスポット・展示コーナー

## 田崎飛鳥 絵画展



## ノーマライゼーションという言葉の知らないまちづくり

**「ノーマライゼーションという言葉の知らないまちづくりアクションプラン」平成27年6月策定**

A 防災・コミュニティ・情報共有・PR  
B 教育・子育て  
C 保健・医療・福祉・介護  
D 産業・雇用・観光  
E 建物・道路・公園・交通

56のアクション

**はまってけらいん かだってけらいん**

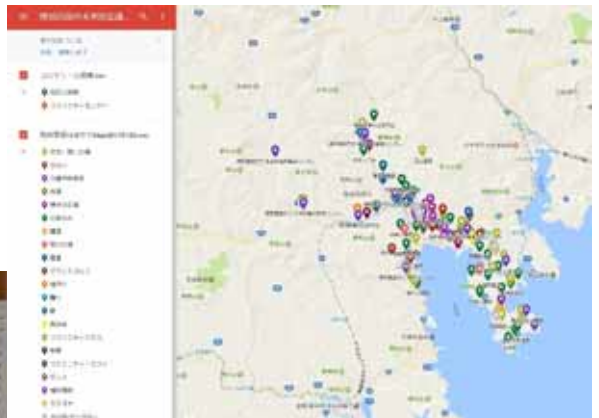
・はまってけらいん かだってけらいん (参加ノーマになって) (話す・語る)  
・つながりつづける健康づくりの会言葉

種崎高田市 保健医療福祉未来図会議

・「保健医療福祉各課タスク協議」から「保健医療福祉未来図」協議へ  
- 市民参加から、国、自治体、NPO、企業、関係者による市民参加型会議として、市民の立場から課題や問題意識、希望などを話し合う。2017年4月27日(月)第1回保健医療福祉未来図タスク協議  
- 種崎高田市保健医療福祉未来図  
- 種崎高田市 未来図  
- 種崎高田市 未来図  
- 種崎高田市 未来図

**ノーマライゼーションという言葉の知らないまちづくり推進マスター研修 (2018.8.24-5)**

## はまかだマップ





### 安田菜津紀 写真展

## 『HIVと共に生きるカンボジアの人々/復興へと歩む陸前高田の人々』

「あそこにエイズの村がある」、  
人々が指差した先には、緑の壁。  
それがこの村との出会いだった。

カンボジアに初めて渡航してから12年となる。  
目まぐるしく変わり続けるもの、そして変わらず残る温かいもの、  
そんな光と影とが交錯し、混じり合う社会に生きる人々の姿を目にしてきた。

通いつけているこの村では、  
HIV感染者を抱えた32家族が生活を共にしている。  
元々は首都プノンペンのスラムの一角に、  
感染者家族のみが政府によって集められた集落だった。  
それが開発に伴い、郊外へと更に追いやられることになる。

そんな村の息吹のひとつひとつを、写真に込めて。



### この街で、これからも 陸前高田に生きる

今でも振り返らない日はない。  
一面の瓦礫に覆われた陸前高田の街を前に、茫然と立ち尽くした、2011年3月。  
あれから5年の月日が経つ。  
整地を待つ市街地、続く仮設住宅暮らし、乗り越えていかなければならないものを数えれば、きりがなくかもしれない。  
それでもここで生き抜く人々と共に少しずつ、街の宝物が息を吹き返す姿を目にしてきた。  
神事や伝統行事、海の幸。そんな営みが取り戻されていくのはむしろこれからだ。  
だからこそ、これからもこの街で、少しでも多くのシャッターを切りたいと思う。  
それは再び輝こうとしているものに触れたいという願いであり、そして同じ悲しみを繰り返さないための意思でもある。  
命のバトンを受け継いでいくために。



### 愛育会 きらり



### あすなる ホーム



オリジナルTシャツ

### 一般社団法人 陸前高田青年会議所







岩手県大船渡保健所



日本赤十字社京都府支部



## 全国AIDS文化フォーラム展（陸前高田・佐賀・横浜・京都）



### 【展示ブースの様子】

会場となった陸前高田市コミュニティホールの1階に、各団体が思いを込めた展示ブースが設置されました。当日は天気もよく、“復活の道しるべ陸前高田応援マラソン”に参加された市民や市外の方々が足を運んでいる様子が見受けられました。

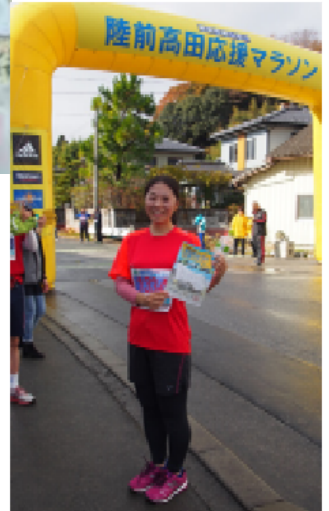
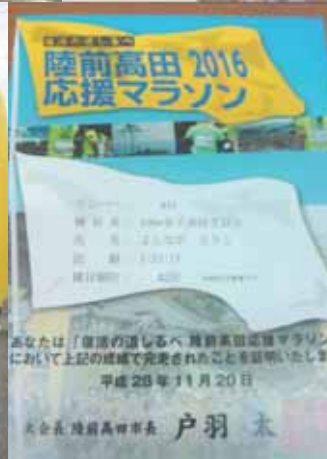
展示ブースでは、各団体の活動内容紹介や、HIV/AIDS、性感染症等の予防啓発パンフレットやグッズ、田崎飛鳥さんの絵画展、陸前高田市が取り組む「ノーマライゼーションという言葉のいらないまちづくり」関連の活動紹介、陸前高田市保健医療福祉未来図会議で作成が進んでいる「はまかだマップ」などが展示され、来場者の興味関心を引くような色とりどりの展示ブースとなりました。

各団体の活動紹介をできる場となったほか、年齢や性別に関係なく、沢山の人がHIV/AIDS予防に限らず、ノーマライゼーションという言葉のいらないまちづくりを自分のこととして考えるきっかけになりました。

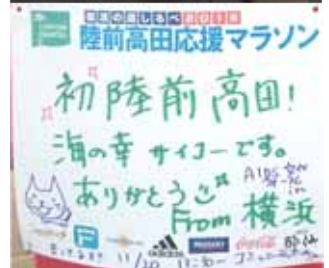


# 陸前高田応援マラソン：ともに走ろう、ゴールは一緒

- ・陸前高田市青年会議所 畠山晃男
- ・陸前高田市地域包括ケアアドバイザー 佐々木亮平
- ・AIDS文化フォーラムin横浜 金子壮 白井美穂 吉永陽子
- ・AIDS文化フォーラム 秘忍者 ジミー・ハットリ



AIDS文化フォーラム in 横浜  
長谷川病院 (東京都三鷹市) の吉永陽子院長、10キロ完走！



AIDS文化フォーラムin陸前高田と同日に開催された【復活の道しるべ陸前高田応援マラソン】。多くの市内の方々をはじめ、市外の方々もたくさん参加され、合計1,022名の方が参加し開催されました。陸前高田市が掲げる【ノーマライゼーションという言葉のいらないまちづくり】とAIDS文化フォーラムin陸前高田の掲げる【ともに生きる～誰もが住みやすいまちに～】。ともに同じゴールを目指しともに走ろう(がんばろう)という気持ちを胸に、今年から新設されたファンラン部をAIDS文化フォーラムの皆さんとともに走りました。愛知県から参加の秘忍者ジミー・ハットリさんの雄姿とともに東海新報に取り上げられました。マラソン中は、多くの地域の方からたくさんの声援受け、楽しく交流しながら精一杯走り抜けてきました。



東海新報 平成28年11月24日

第17756号 平成28年(2016年)11月24日(木曜日) 日刊新聞(朝刊)



陸前高田市上野原地区が約1,000人を動員してボランティア活動に励んだ。



ボランティアの皆さんがボランティア活動に励んだ。



ボランティアの皆さんがボランティア活動に励んだ。



ボランティアの皆さんがボランティア活動に励んだ。



ボランティアの皆さんがボランティア活動に励んだ。



ボランティアの皆さんがボランティア活動に励んだ。



ボランティアの皆さんがボランティア活動に励んだ。



元プロ野球投手の青藤和巳さんも児童と一緒に走った



記録を1秒でも縮めようと、ラストスパートで意地を見せる!



陸前高田市や活動のノボリを掲げて走る参加者も



HIV感染防止を訴える緑色者ジミー・ハットリは、この日で5%を完走!



苦しい時こそ笑顔で!



ランナーの背中にもメッセージ



元気に飛び出した小学生女子のランナー



大浜外郎太の女子学生も応援に花を添えた

# 駆け抜ける

## 復活の道しるべ

### 陸前高田応援マラソン

陸前高田市教育委員会と同市体育協会が主催し、アディダスジャパンなどの協賛を得て開催された「復活の道しるべ陸前高田応援マラソン2016」。震災前に「市民マラソン」として興じられていた大会は、昨年からの市内の人たちの復旧交流を促す契機として生まれ変わった。市外から参加したランナーは半崎町内の秋の風景を楽しむとともに、同市の復興状況にも理解を深めた。



## 個性的なコスチュームも





# はまかだライブ：ともに歌おう「ありがとう」 みんなで手話で歌いましょう

出演者 シンガーソングライター まっと (陸前高田市在住)  
手話講師 陸前高田市役所保健課 保健師 蒲生恵美

平成27年度「AIDS文化フォーラムin陸前高田」特別企画  
『みんなのアイがウタになる！～I(あい)は地域を育てる！～』作成楽曲

## ありがとう

まっと (Funny Pig)

あなたの後ろ姿をずっと追いかけていた  
一番近くにあるのに一番遠かったモノ  
「ただいま」「おかえり」ありふれていた  
言葉に愛があった  
君と僕と町とこの空と全部繋がっている  
ありがとう 君に ありがとう 心から  
目と目合わせて 手と手繋いで 共に今を生きよう  
ありがとう 君に ありがとう 心から  
笑顔と笑顔 心重ねて 共に今を歌おう

あなたの後ろ姿をずっと忘れないよ  
一番簡単なモノなのに一番難しいモノ  
「おやすみ」「またね」ありふれていた  
言葉に意味があった  
失ってから初めて気づく本当の愛の形・・・  
ありがとう・・・ ありがとう・・・ きっと同じ事つぶやくでしょう  
ありがとう・・・ ありがとう・・・ 同じ気持ちでいられるのならば  
くりかえし  
共に今を生きよう  
共に今を歌おう  
ラララ  
ラララ・・・



米崎町出身のシンガーソングライター まっと君によるライブ。このイベントのテーマ曲「ぼくらにできること」など4曲をトークを交え、熱いライブを披露してくれました。



最後には中高生を中心に愛について応募いただいた詩を基に、まっと君に作成していただいた楽曲「ありがとう」を会場の皆さん、ボランティア参加してくれた高校生の方々と手話をしながら一緒に歌い、会場が一つになり今回のイベントを締めくくりました。

閉会の言葉  
一般社団法人陸前高田青年会議所  
理事長 長谷川順一



# 打ち上げはまかだ

「ともに生きる」、「ともに創る」を  
実感できたはまかだ



## 新聞記事

東海新報  
平成28年11月22日

# 「住みよいまち」目指し

セッションや  
講演など実施  
AIDS文化フォーラム

陸前高田



AIDS文化フォーラムin陸前高田(同通)の開催のいきなりまち(常務委員主催)は20日、陸前高田市高田町の市コミュニティホールで開かれた。同市がテーマに掲げる「ノー

マライゼーションとい  
る営業のいらないまち  
づくり」の推進を目的  
としたイベント。ト  
ークセッションや講演、  
ライブといった多彩な  
プログラムを通し、約  
1000人の参加者たち  
が「誰もが住みやすい  
まち」の実現に向けて  
思いを新たにされた。  
運営委員会は、市と  
一般社団法人陸前高田  
青年会議所、県大船渡  
保健所、NPO法人市  
支障連絡協議会Aid  
TAKATA(市災害  
FM)で構成。冒頭、  
主催者を代表して戸羽  
大市長と同保健所の久  
保慶祐所長が、「陸前  
高田の目指すまちづく  
りに非常に大きなな  
わりを持っていると思  
う。まちづくりにつ  
いて考えるいい機会に  
な

るのでは」「ステイ  
マ(差別、偏見、汚名  
はいろいろなレベルで  
存在している。それを  
地域で乗り越えるため  
の。はまかだ。この  
フォーラムを通して  
「マライゼーションと  
いう言葉のいらない地  
域をつくるっていくこ  
ができた」とそれぞ  
れあいさつした。  
はじめに、トークセ  
ッション「はまかだト  
ーク」ともに走ろう、  
ゴールは「一緒」が行わ  
れた。セッションに  
は、属性まひの障がい  
がある東京大学先端科  
学技術研究センター准  
教授・熊谷晋一郎さん  
をゲストとして招いて  
いたが、急病のため欠  
席。

戸羽市長、同青年会  
議所理事長の長谷川順  
一さん、市地域包括ケ  
アアドバイザーの岩室  
神也さんが参加し、熊  
谷さんの言葉を紹介し  
ながら「自立は、依存  
先を増やすこと」「希  
望は、絶望を分かち合  
うこと」について一緒  
に考えた。

このあと、講演「い  
ま、若い世代に伝えた  
いサバイバルガイド  
コミュニケーション、  
ネット・デートDV、  
HIV/AIDS・失  
恋」と、「はまかだラ  
イブ」を実施。講演で  
は産婦人科医の上村茂  
仁さん、泌尿科医で  
もある岩室さん、保健  
師の佐々木亮平さんが  
講話し、ライブには市  
内に住むシンガー・ソ  
ングライターまっさと  
さんが出演した。

また、「ノーマ」は  
またかスポット展示コ  
ーナー」も設置され、  
地域や関係団体の取り  
組みを広く紹介。来場  
者たちは自由に展示を  
見て回り、身近で活動  
を展開している団体へ  
の理解を深めていた。





AIDS文化フォーラム in 佐賀(2017.6.17-18)

AIDS文化フォーラム in 横浜(2017.8.4-6)

AIDS文化フォーラム in 名古屋(2017.9.24)

AIDS文化フォーラム in 京都(2017.9.30-10.1)

AIDS文化フォーラム in 陸前高田(2017.12.3)

ノーマライゼーションという言葉のいらないまちづくりイベント  
**AIDS文化フォーラム in 陸前高田**



## AIDS文化フォーラム in 陸前高田

【主催】AIDS文化フォーラム in 陸前高田運営委員会

(一般社団法人陸前高田青年会議所・陸前高田市・岩手県大船渡保健所・特定非営利活動法人陸前高田市支援連絡協議会Aid TAKATA(陸前高田災害FM))

【助成金】公益財団法人エイズ予防財団(平成28年度エイズ予防財団助成事業)

Special Thanks (チラシ・報告書表紙デザイン) 母袋秀典

### 2016AIDS文化フォーラム in 陸前高田報告書

発行日 平成29年3月31日

編集 一般社団法人陸前高田青年会議所(岩手県陸前高田市高田町字中田43番地2)

陸前高田市役所(岩手県陸前高田市高田町字鳴石42番地5)

岩手県大船渡保健所(岩手県大船渡市猪川町字前田6番地1)